
さつき

久世はるや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さつき

【Nコード】

N3411P

【作者名】

久世はるや

【あらすじ】

「5月、紫陽花、少年」をテーマに。
幼い少年。

弟が紫陽花を摘んできた。

それほど大きくない花房、青紫色がひしめいている。端のほうまできれいに咲いたそれは、弟の小さな手の中で、梅雨の訪れを告げているようだ。

「幸月、それ、どうしたんだ」

僕が問うと、弟——幸月はまだまだ幼い顔をほころばせて答えた。

「まだ5月でしょう。それなのにもう咲いてたから、珍しくって」

……どうやら、僕のかわいい弟は、紫陽花という花は6月になるまで咲かないものだと思いついてるらしい。

僕は幸月の頭をくしゃりと撫でて、そつと教えてやる。

「紫陽花は5月の終わりから咲きはじめるんだぜ」

「そうなの？」

「ああ、そうさ。そうじゃないと梅雨に間に合わないだろ」

「そつかあ……にーにはやっぱり物知りだね」

「幸月もにーにの年になれば同じくらいになるさ」

僕の言葉に、幸月は嬉しそうに笑う。……別に僕は、自分のことを素晴らしい兄だと思ってるわけじゃない。ただ、幸月が僕のことを”にーに”と呼んで慕ってくれている以上、僕にはきちんと”兄”でいる義務があると思うだけだ。

「ねえにーに、これ、花瓶にさしたほうが良いよね」

「そうしないとな。広口で背の低いコップがあつたろ。あれにする
と良いよ」

「うん！」

幸月は紫陽花を僕の手にあずけて、コップを取りにぱたぱたと駆
けて行った。

同じ年頃の少年に比べたら、幸月はやはり幼いだろうか。でも、
両親にとっては遅くの子どもだから可愛がるのも当然だし、僕だっ
てこの年の離れた弟に腹を立てることは滅多にない。悪い言い方を
すれば甘やかされ放題で育った幸月。わがままにも聴かん坊にもな
らなかつたぶん、むしろ僕はすごいと思っている。

……と、僕がそんなことを考えていると、

「相変わらずお兄ちゃん子だな、幸月は」

突然、うしろから声が降ってきた。

僕はびっくりして振り返り、少し高い位置にある顔を軽く睨む。

「……おどろかすなよ、父さん」

「なんだ、おどろいたのか。そいつは悪かったな」

父さんは部屋着にしている着流しの袂に手を突っ込んだまま、僕
をちらりと見て笑った。

「幸月の奴、あの調子じゃお前が何か言ってやらんと一生離れんぞ」
「……そう思うなら、父さんから言えば良いだろ。父親なんだから」
「多感な少年時代を迎えてる息子にそんなこと言えるほど、父さん
は薄情じゃないんだ」

「それを長男に押し付けるのは薄情じゃないのかよ」

「獅子の子落とし、かわいい子には旅をさせよ、私の心は夏模様」
「意味わかんない」

僕がきつぱりと言うと、父さんは呆れ顔になってため息をつく。

「あーあ、幸月と違ってお前は全くもって可愛いげがないな、八宵」
「10歳と24歳を同じ土俵で語るなよ」
「10歳だった時、お前は名前のことばかり聞いてた」

しかたがないことだろう。

僕は八宵という。誕生日は4月だ。なんでも、本当はふつうに弥生とつけるはずが、予定日から8晩遅れたために3月ではなくなってしまったのだそう。だから八宵。幼い少年だった頃の僕は、なんだかその冗談のような由来が気に食わなかった。

月の名なんて女っぽい、と僕は主張し続けてきたのに、懲りずに父さんは5月に生まれた弟を幸月と名付けた。

「5月ってのは狩りに良い月なんだよ。だから幸いなる月、幸月というんだ」

いかにも文学者である父らしい理由だったけれど、僕は、

「……女の子みたいだ」
そう、コメントした。

それから10年の月日が流れ、幸月は楽しそうに”多感な少年時代”を過ごしている。

「にーに、水入れてきたよ！」

ゆっくり、心だけ逸らせて戻ってきた幸月の手の中のコップに、美しい花房をそっと浮かべてやる。

「ありがとう、にーに」

「気をつけて運べよ」

「どこに飾ろうかな……」

「……母さんの前が良い」

父さんが口を挟んで、手を伸ばし紫陽花の花弁に触れた。

きょとんとする幸月に、父さんはどこか懐かしそうな目をして、言った。

「さすがだな幸月。紫陽花は母さんのいちばん好きな花なんだぞ」

「本当に？」

「ああ」

返事を聞くなり駆け出そうとし、踏み止まって慎重な歩調になりながら、幸月は隣の部屋に向かう。

先週、幸月が10歳になった日、それは母さんがいなくなって10年が経った日だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3411p/>

さつき

2010年12月10日18時28分発行